

学びの心を育む

滋賀県立虎姫高等学校同窓会

とうきょうしすい 東京姉水会

知的刺激を通して
学びの道へのモチベーションを活性化する



▲東京大学・本郷キャンパスの赤門前

この企画のそもそものは、二〇一一年五月の東京姉水会の総会で、当時の西嶋校長から、在校生の東京の大学キャンパス見学の依頼があり、これにOBで当時東京大学（以下東大）大学院建築学教授であった高田先生が対応したことに始まります。この「キャンパス見学」は「東京大学連携講座」と位置付けられ、虎姫高校の一、二年生を対象としていました。内容は、大学で行われている授業を体感し、また東大キャンパスを見学するというものです。言うまでもなく日本の最高学府とされる東大が備える学問の雰囲気に触れることで学習意欲を刺激し、より深く将来を考えるきっかけとした、というのがその狙いです。具体的内容は東大の高田先生と虎姫高校の間で検討され、二〇一一年十月に

●滋賀県立虎姫高等学校と同窓会である東京姉水会は、平成二十三年（二〇一一）に東京大学に所属する有志教員との間に「東京大学連携講座」というものを立ち上げ、同年末に実施した。いわゆるオープンキャンパスとは一味も二味も違うこのユニークな取組みは、二〇二〇年で十回目を迎えたが、その間、東京工業大学、慶應義塾大学の有志教員とも連携し、三大学を巡る企画となつて、参加する生徒の学習意欲を刺激し続けているという。この企画を今日の形まで進化させ、各大学で現在も積極的にこの活動を支えている東京姉水会の方々に、活動の実際とこれからの展望を伺った。

東京三大学見学ツアーの 誕生の経緯とアウトライン

その後、二〇一四年から、東京工業大学（以下東工大）の藤居先生、慶應義塾大学（以下慶應大）の北居先生に順次参加してもらえるようになり、二日間で三大学のキャンパスを巡る企画となりました。これは東京姉水会の総会で出た案で、各大学の違いや特徴などを感じ取れる良い機会だということで受け入れられ、現在に至っています。この結果、スケジュールも、初日には東大と慶應大を訪問、二日目には東工大を訪ね、同大学で東京姉水会主催の昼食会を開催するのが通例となっています。このツアーには、毎回、校長先生と学部主任の先生が生徒を引率し、例年、昼食会には数名のOBが参加します。

実際の参加者の規模と参加方法

参加者は例年十五〜二十名程度です。女子が多いですね。手順としては、まず参加者を募集します。希望者が多い場合は、ツアー参加の動機など小論文を書いてもら

虎姫高校から参加対象となる生徒の保護者あてに趣意書と参加申込書を配布しました。募集の要項では、人数は十五名程度、時期は十二月末で一泊二日、訪問先は東大本郷キャンパス、生徒の負担は交通費と宿泊費で一萬五千円程度で、残りの半分程度をPTAが補助するというものでした。

初日は十一時頃に東大に到着し、十三時に高田研究室を訪問、約九十分の講義・演習を聴講、その後、夕方まで本郷キャンパスを見学しました。二日目は都内の有名建築の見学、東京駅のレストランでの東京姉水会主催の昼食会など、充実したスケジュールでした。

い選抜します。交通手段や宿の手配などは高校が旅行業者に依頼します。一方、受け入れ側は、各大学の虎姫高校OBの教員が中心となって準備します。この企画は各大学の広報の協力も得ており、ツアーの際には大学の案内グッズなどを配布しています。更に、現役大学生にも協力してもらい、キャンパスの案内係を務めてもらっています。例えば東工大には広報サポーター制度があつて、大学広報から必要な人数の学生を派遣してもらえます。この学生はアルバイトなんですが、ツアー中の虎姫高校の生徒との雑談を含む対話が、極めて良いコミュニケーションの場を形成していると思います。案内係は通常三名ほど用意します。

十回目となる二〇二〇年のツアーは、新型コロナウイルスの蔓延により中止となりましたが、代わりにオンラインによる「ツアー」を実施しました。内容はこれまでとは大分異なります。まず日程は二日間で、三大学の説明、東工大留学促進サークルの協力による現役大学生の座談会企画、東京姉水会メンバーとの懇談企画がメ



上：東京大学の研究室での特別講義
下：東京工業大学・実習室での説明



●連絡先 滋賀県立虎姫高等学校

〒529-0112 滋賀県長浜市宮部町 2410 番地

TEL : 0749-73-3055 FAX : 0749-73-2967

URL : <http://www.torahime-h.shiga-ec.ed.jp>

姉水会 URL : <http://www.torahime-h.shiga-ec.ed.jp/information/sisuikai.html>

東京姉水会 URL : <http://www.tokyo-shisuikai.org>



左：高田 毅士（たかだ・つよし）氏（高25）

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 安全研究・防災支援部門
リスク情報活用推進室 室長（前：東京大学大学院 教授）

中：北居 功（きたい・いさお）氏（高32）

慶應義塾大学大学院 法務研究科 教授

右：藤居 俊之（ふじい・としゆき）氏（高35）

東京工業大学 物質理工学院 教授

インです。リアルと違い、オンラインでのコミュニケーションには戸惑いもありましたが、その一方で、オンラインでは遥かに多くの人の「参加」が可能となるメリットもあります。実際、両日ともに三十名を超える参加がありました。さらに東京姉水会メンバー七名の参加した対話の中での体験談など、例年には無いメニューの導入も、他のメニューに劣らず良い刺激になりました。このようにオンラインという形式を採用したことで必然的にメニューも変化せざるを得ませんでした、それでも企画本来のコンセプトに則って関係各組織の力を結集した結果、新しい形の「ツアー」ができたのではないか、と思っております。

参加者の反応と感想

「ツアー」の後では毎回、参加した生徒から感想をもらいますが、良好なコメントが多いですね。具体的には「同じ高校で学んだ先輩からの話が聞けて貴重」、「大学キャンパスを間近に見られた」、「大学の講義室、実験室などに入れた」、「遠く東京で活躍している先輩たちからのアドバイスが良かった」などの言葉です。実際、この「ツアー」のような機会でもなければ、経験できないようなことばかりですし、まして、やっと高校生活に慣れたばかりの一年生では、大学生活のイメージなど到底湧かないことでしょう。であればこそ、高い目標と未来に広がる可能性の一端に触れることのインパクトは大きいわけですし、勉学への刺激はより強くなると思います。この一種のカル

チャーショックを体験するだけでも、わざわざ東京の三大学のキャンパスを訪問する意味は十分にあるでしょう。

また実施する側としては、東京の大学に進学する学生の数が少し増えたようにも思います。無論、この企画は、開催する三大学への入学者を増やすことが目的ではありません。あくまで大学の多様性を理解してもらうことに主眼があります。また、毎年実施している企画であっても参加する生徒の顔ぶれは変わりますから、同じ内容を行っても問題はないとも言えますが、実際には教員個人が反省・研究し、よりよくなるよう工夫しています。例えば大学が推奨する見学ルートでは、図書館などの比較的一般的な施設を巡るようになっていますが、本企画では教員それぞれの専門性を活かして、高校生が普段目にすることができないような実験装置を見せたり、また講義で実際に利用する施設、例えば慶應大なら「模擬法廷教室」などを体験してもらったりします。これは高校からの要望ではなく、受け入れる教員がそれぞれに考え行っているものです。ですので、滞在時間は毎年同じでも内容は年々良くなっていると自負しています。

東京三大学見学ツアーのこれから

東京姉水会の総会では、毎回来会される現役の校長先生と懇談し日程、内容などの検討をします。高校からは、この企画を毎年継続して欲しいという要望があります。ただ本企画の一回の効果は限定的だとも思います。加えて、今後も現在

と同様の形で実施できるとは限りません。ですので、二〇二〇年のようにその年の状況に応じて可能な実施スタイルを検討すべきでしょう。受け入れる側の負担も考慮すれば、お互いに無理のない範囲で継続することが大事だろうと思います。

この企画は虎姫高校の行事として既に定着した感があります。新型コロナウイルスの影響で、その行事が中止となったのは残念ですが、代替として行ったオンラインでの開催では、行事の全てを録画記録しました。それを、当日参加できなかった生徒たちも共有できたというのは大きな収穫だったと思います。オンライン開催では東京姉水会の若手会員の参加も多く、そうした年の近い先輩からのアドバイスはやはり刺激的で、より親しみやすいものだったようです。実際に大学のキャンパスを経験できなかったのは仕方ありませんが、これまでとは全く違う経験の中で、新しいやり方のヒントを得たかもしれない、と感じています。それでも大学の空気に直接触れることは重要ですから、早く元のツアーの形に戻ることを願っています。



▲慶應義塾図書館・旧館の前で